

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

秋耕や夕日みれの父戻る

茅ヶ崎市 浜本 文子

△評▽収穫の後の田畑をねぎらうように耕す父。夕日みれの父に働き者の父をいとおしむ子の気持ちが表れている。

水脈引いて車でありぬ秋出水

東京 高木 靖之

△評▽冠水した道路を車が走る映像をしばしば見る。水脈引いてに奇妙な現実がある。

アパートの螺旋階段露の朝

三重 瀬川 令子

母の荷を解けば干し柿まるび出づ

東広島市 福岡 宏

地を被ふむらさき淡し葛の花

愛知 森 恵子

消灯の前の一服夜業果つ

志木市 谷村 康志

蟻一匹聖書の上をさまよへり

東京 土方けんじ

小鳥来る旅の雑誌を繰りをれば

安中市 中島 糸

龍神の星空の下蕎麦の花

京田辺市 梅澤 宗平

名物の何も無き町秋刀魚焼く

志木市 坂本 野歩

西村 和子 選

無花果を挽きくれし母若かりき

名古屋 市 可知 豊親

△評▽どの庭にも果樹が植えられていた頃の思い出。昭和の子どもにとって、イチジクは店で買うものではなかった。

曲り角多き城下や花木権

津山市 森下 弘

△評▽防衛上から見通しのきかない道に囲まれている城。ムクゲは昔から咲いていたに違いない。

菓子パンですます屑鮎や瀬祭忌

東京 徳原 伸吉

いわし雲押され押されてひろがり

岸和田市 妙中 正

とんぼ来る午後には捨つる鹽水

葛城市 八木 誠

枡席にいつも見る客秋扇

浜松市 久野 茂樹

藻の花や旅寝重ねて肥前肥後

茨城 矢次 美保

初秋やインクの匂う新刊書

土浦市 今泉 準一

肩揉まれ心ほぐるる菊日和

大阪市 吉田 昌之

早起きも情眼も気儘秋の声

大阪市 木挽 弘志

井上 康明 選

戦なき世を満月に祈りけり

彦根市 水野 隆雄

△評▽満月とは中秋の名月、限りなく澄み渡った一夜限りの月。戦争のない世界が来ることをかなえてくれるのではないだろうか。

おぼろの古材の残余鳥渡る

東京 石川 黎

△評▽歴史ある寺院の改修工事だろう。残った古材の上を過ぎる渡り鳥に、はるかな歳月を思う。

冬空を指して動かぬ林かな

龍ヶ崎市 小宮 光司

秋風に骨を埋めし南洲忌

東京 野上 卓

分け入れば隠り沼一つ水の秋

浜松市 久野 茂樹

棕鳥の空に哀しみ募りゆく

甲府市 清水 輝子

背丈越す太鼓叩きぬ盆供養

弥富市 富田 範保

灯火親しむ熟成の赤ワイン

仙台市 鎌田 傑

ぬかご飯母は生涯郷ことば

東京 福島 照子

廃校となりて大木法師蟬

香芝市 河野 嘉雄

片山由美子 選

秋祭終はりて小さき村となり

北本市 萩原 行博

△評▽秋祭は収穫に感謝して行われ、村祭や里祭ともいう。にぎわいが去り、静けさが戻った村を小さく感じたのである。

やや寒の石段めらす夜の雨

富士宮市 矢野 悦子

△評▽「やや寒」は秋のうちの寒さをいう。夜の雨にぬれている石段が、その寒さを印象づける。

首消えし給食室や虫の声

東京 郡司 正男

秋風のゆらしゆくものみな軽し

秦野市 林 ち島

からつぼの郵便受や秋の雨

平塚市 日下 光代

林檎刺く子に言はでものをいふ

川越市 大野有之介

鶏を真似る子のごま秋高し

大阪 福田 愛

村をあげ十人の子の運動会

日野市 田村登代子

ひとむらのみな揺れてゐる猫じやらし

広島市 谷口 一好

少しづつ細くなる篠草紅葉

野田市 押江 成行

<歌集>

新刊

<句集>

◇西村和子『素秋』 毎日俳壇選者の第9句集。2019年から24年までの作品を収める。みごとにコロナ禍と重なる句集の制作期間ではあったが、作品の普遍性をもって混乱の時代を超えた感がある。△五月蘭（さつきやみ）京に逢魔（おま）がたいくつ△衣替へて居職（いじやく）の心定まりぬ△紙捨てて髪切り捨てて涼新た△△へもを書けば遺書めく夜の秋△夫を見送って20年、つま恋の心情がより昇華されたかたちの作品も多く見受けられ、著者自身の次なる一歩が見えてくるような一冊だった。△夢に逢（あ）ふ時は社年明易（あけやす）し△（朔出版・2970円）

◇向瀬美音編『国際俳句歳時記 夏』 夏の季語による作品の選集。フランス語訳、英訳併記。マレーシア、フランス、アルジェリアなど収録作家は世界各地に及ぶ。本書は季語の「裸」につき、各国の感覚の違い、季語意識の有無についての重大な提案をしている。（ふるんす堂・2750円）（俳人・樺未知子）

◇伊藤一彦編『若山牧水全歌集』 愛読者の多い牧水の生涯140年記念の刊行。既刊15歌集、歌集未収録歌篇、解説、詳細年譜、初句索引、牧水論12本を収録した必読の一冊。△秋の朝酒場の鏡に見入るわれのひとみの静かなるかな△（角川書店・5500円）

◇時田則雄『十勝から』 十勝で農業を営む著者の2004年から21年間にわたる、全国農業共済協会の月刊誌『NOSAI』に連載した252編を収録。家族の支えを得て広大な大地と格闘する日々、に感銘を受ける。△日がな一日黄のバックホー（うな）らせて長芋掘りぬ八千本余△（ながらみ書房・2530円）

◇伝田幸子『勿忘草（わすれなぐさ）』 2018年から25年春までの歌を収録、長野市在住の著者の第7歌集。著者と夫は共に大病を乗り越えて前向きに生きる意欲が伝わる。△樹も人も生きる限りものをいふ山毛櫨（ぶな）の巨木と対峙（たいじ）して今△（角川書店・3080円）（歌人・中川和子）